スサノヲのウケヒをめぐって

斯ノヲが高天原に昇天する経緯については、古事記神話と日本書紀本文神話のあいだに大きな違いはない。いずれも根の堅州国（日本書紀）、では一貫して「根の国」に行く前に、彌阿弥陀に暖えの挨拶をしたいと思って、昇天することになっている。ただし、日本書紀本文神話では、スサノヲが高天原へと荒々しく近づいて来る様子、スサノヲが自身の統治している国を奪おうとしているのではないかとアマテラスが疑っている様子。さらに、アマテラスが、スサノヲが近づいて来るのを警戒して、武装して迎え撃とうとする様子。これらのいずれも、両神話において大体一致していると言えるであろう。そのなかでもとりわけ、アマテラスが武装して、闘志を高めてゆく様子は酷似している。本稿およびそれに先立つ論稿では、古事記神話と日本書紀本文神話の違いについて注目しているわけではないが、この事例のように、記述がこれほど一致しているというのも、逆の意味で興味深いものがある。この点については、
両神話の編纂者がおそらく似たような伝承を所持していて、しかもひとえ手を加えない形での記述を採用しているのではないかと推測することもできるであろう。

そして、スサノヲはアマテラスに会うことになる。スサノヲは、姉に三度と会えなくなるからと思って、暇乞いの挨拶にわざわざ来たのであるが、アマテラスの態度は非常に冷淡なものになっている。古事記神話の記述によれば、イザナギに三貴子に各国の統治を分担させたので、当然のことながら、アマテラスは、スサノヲが任せられた海原の統治をしているものと思っており、それが取りやめになって、根の堅州国に行くことになったので、自分は統治する国を奪う目的があるのでないかと、アマテラスがスサノヲを警戒するような記述になっているのである。

このように、スサノヲがアマテラスを訪ねてきたことについて、自分が統治する国を奪う目的があるのではないかと、アマテラスがスサノヲを警戒するような記述になっているのである。

 oceans

古事記神話と日本書紀神話の比較研究（岸根）

四〇三
ウケというのは神の意図を占う呪術としてとらえることができるのであるが、この「ウケ」という言葉の漢字表現の仕方に関して、古事記神話と日本書紀本文神話の記述に注目すべき違いがあると思われる。すなわち、古事記神話ではこの「ウケ」を一貫して「宇気比」と表記している（動詞の「ウケ」は「宇気布」と表記している）のに対し、日本書紀本文神話ではそれを「誓」もしくは「誓約」と表記している。従来の研究では、両神話の表記の違いについては特に留意されておらず、結局的に両神話におけるウケに関する記述を混ぜ合わせてしまい、意味を前提とする。言語を用いた呪術であると理解されている場合が多い。たしかに古事記神話、あるいは、古事記全体に出てくるウケにも宣誓が提示されているものが多くあることを意味する「うく」という語に由来するものと考えられる。しかし、「ウケ」という表現がおそらく受け取るうを示す必要はないと考えられる。事実、古事記神話におけるオホヤマツミのウケでは宣誓は提示されておらず、ホノニニギがイハナガヒメを送り返したという出来事から、オホヤマツミはホノニニギとその子孫の未来を決定したのであるし、古事記中経巻にある香坂王と恐熊王が行ったウケ狩り（宇気比縛）でも、やはり宣誓は明示されていない。これらは宣誓が自明のこととして、その記述を省略した——もっとも、ウケにわたって宣誓の提示が必要不可欠なものであるとするれば、本
来、そのような省略は原理的に不可能なことのように思われる——ということではない。ウケヒで宣誓を提示することは、前の宣誓を提示してない表明と考えられるのである。

ウケヒという言葉の原義に基づいて、ある出来事を神の意思の表れであると受け止め、その意思を知ろうとするならば、ウケヒは成立立ちると考えられるのである。

もしこのような理解が妥当であるとするならば、日本書紀本文神話に見いだされる「誓」とは、日本書紀にまで安易に結びつきてしまうと、古事記神話のウケヒに対する理解を誤った方向に導いてしまう危険性が出てくるように思われる。ちなみに、筆者が調べたところでは、本文と別伝を含む日本書紀神話、あるいは『日本書紀』全体で見いだされるウケヒの記述において、宣誓の提示を伴っていないうちのが存在していなかった。それは、日本書紀の「ウケヒ」が「誓」もしくは「誓約」であるがゆえに、以上のよう、そもそもウケヒというものをどのように捉えるかという点について、古事記神話に見いだされる。同様に宣誓の提示を伴わないスサノノのウケヒの記述を理解してゆく上で重要な視点となりうるように思われる。
スサノヲのウケヒに関する違い

スサノヲが昇天するまでの記述については、古事記神話と日本書紀本文神話のあいだにそれほど顕著な違いは見いだされなかったのであるが、このウケヒに関する記述では、両神話において大きな違いが見いだされるのである。こ

第一は、前項でも言及したように、古事記神話では宣誓が明示されていない点である。日本書紀本文神話では次のような宣誓が示されている。

もしウケヒに宣誓が必要であるとすれば、古事記神話の記述はウケヒとしては成り立っていないうちに、両神話の記述もその気分や心の展開を見て、それがウケヒとして成り立っていないとは捉えられてい

いうように思われるのである。

第二は、勝敗の判定についてである。そもそもこのウケヒは、スサノヲに高天原を奪うという野心があるとのことであるが、両神話の記述を見るかぎり、スサノヲの勝ち

がスサノヲの野心の非存在を、アマテラスの勝ちがスサノヲの野心の存在を示していると考えざるをえないであろう。それである「マサカツアッカッカチハヤヒ」（日本書紀本文

さらに、勝敗の問題を考える上で確認しておくべきことがある。それは「マサカツアッカッカチハヤヒ」（日本書紀本文
(德文) 经营管理哲学与企业绩效的

在经济全球化的背景下，企业的经营管理和绩效对企业的发展至关重要。企业的发展受到多种因素的影响，如市场环境、企业管理水平、技术创新等。其中，企业管理水平是影响企业绩效的重要因素之一。

有效的企业管理能提高企业的竞争力，促进企业的可持续发展。有效的管理包括对企业的战略规划、组织结构、人力资源、财务管理等方面的管理。有效的管理能帮助企业更好地适应市场变化，提高企业的生产效率和经济效益。

企业绩效的评价是衡量企业管理水平的重要指标。企业绩效的评价通常包括财务指标和非财务指标。财务指标如营业收入、净利润等，非财务指标如员工满意度、客户满意度等。有效的管理能提高企业的绩效评价指标，从而提高企业的市场竞争力。

因此，企业应该重视企业的经营管理，提高企业管理水平，以提高企业的绩效，为企业的发展奠定坚实的基础。
これに対して、日本書紀本文神話の場合、ウケヒを行うときに、男子を生んだ場合には清らか心があるという宣言が明示されている。スサノヲは男子を生んでいるが、古事記神話と同様に、アマテラスは物実（ただし、日本書紀本文神話では「物根」）の持主がその子の親であると発言している。したがって、スサノヲが勝利したことに関する事情が大きく異なっている。そこには、「勝さび」という表現は出てこないが、その神話にも「このあとにスサノヲの行状はひどくなって、手がつけられなかった」という趣旨の記述があるので、古事記神話と同様に、ウケヒにおける勝利で抑制の効かなくなったスサノヲが乱行に至ったと考えているのかもしれない。ただし、日本書紀本文神話ではスサノヲを元々残忍な性格であるとする位置づけていたので、その本性が露になったと捉えている。と解釈することも可能であろう。

スサノヲの行状の具体的な内容は両神話であるが、異なる点もある。そこで、両神話の具体的
古事記神話

（一）アマテラスの田の阿（畦のこと）を壊した。

（二）アマテラスの田の灌漑用の溝を埋めた。

（三）大嘗を行い建物を汚物で汚した。

（四）神に捧げる衣を織る建物の屋根に穴を開け、皮を逆さに剥いた馬を投げ入れた。

日本書紀本文神話

（二）アマテラスの田の畦を壊した。

（三）アマテラスが新嘗を行うとき、その場所を汚物で汚した。

（四）秋（収穫の時期）になって、アマテラスの田に馬を伏せさせた。

両神話で挙げられているものは、従来指摘されているように、罪を犯すために、六月と十二月に中臣氏が奏上する「六月の晦の大祓」という祝詞のなかで「天つ罪」と規定されている八つの行為（１）畦放、（２）溝理、（３）垣放、（４）塀放、（５）串刺、（６）生剥、（７）逐剥、（８）扉戸」とある程度重なっている。両神話の記述を合わせれば、六つまでが該当して四〇九

（９）
生態システムにおける農業における記述を合わせるならば、八つすべてが該当する。それらの行為は、田の耕作と、神の恵みを得るための農耕祭の実施を妨害するものであり、端的に言えば、農耕によって成り立っている社会を機能不全に陥られる反社会的行為であると言えよう。

古事記神話の（四）の結果、アマテラスに命じられて衣を織っていたアマノハタオリメという女神が負傷して死んだと記述しているのに対して、日本書紀本文神話の（五）の結果、アマテラス自身が負傷したと記述しており、スサノヲの乱行で誰かどのような被害を受けたのかについて両神話の記述は異なっている。そのあと、アマテラスは天の石屋に築かれる前に、本人以外が被害を受けたとするならば、負傷して死んだということになるだろう。死んでしまった場合、天の石屋に築かれる女神が負傷して死んだということになる。この女神は、古事記神話の（七段の第一書）では、「ワカヒルメ」という別名として示されている。この「ワカヒルメ」という女神名は、日本書紀本文神話と同様に、「オホヒルメツ」という女神と対応関係が想定され、アマテラス自身が死んだと記述を避けるために、このような分身的な神が想定されたのかもしれないのである。
なる記述が見いだされる。

古事記神話では、前項で示した（三）の乱行までの段階では、アマテラスはスサノヲを咎めておらず、逆に弁護し、その弁護はかなり苦しい言い訳に近いもので、大嘆の祭祀を行う神聖な場所を汚物で汚したのは、神事に没頭して酒を飲み過ぎたためと嘔吐してしまったからであるとし、田の阿を壊したり、灌漑用の溝を埋めたのは、土地がもったいないと思ったからであるという述べている。それはウケヒにおいてスサノヲの勝ちが示されたということを考慮しているからなのである。ただし、そう

ないと思ったからであるというように述べている。

アマテラスによるこれらの発言は「詔り直す」と表現されている。これは、前述したように、スサノヲとアマテラスがウケヒを行った際に、生まれた子の物実の持ち主がその子の親であるというアマテラスの発言が「詔り直す」と表現されていたのと通じるものがあり、言葉を提示することによって、そこに内在する特別な力が現実の事象をその言葉に添形に変えてしまうという言葉信仰に基づいた行為であると考えられる。このように、アマテラスは言葉の

もつ特別な力によって、スサノヲの乱行を正しい行為に変えようとするのであるが、スサノヲの乱行が激しさを増して、アマハタオリメが死んでしまうと、「見舞みて」すなわち、恐怖して、天の石屋に篭ってしまって、そこで神に捧げる衣を織る建物の屋根に穴を空けて、皮を剥いだ

前項で示したような乱行を次々と行い、そして（五）で神に捧げる衣を織る建物の屋根に穴を空けて、皮を剥いだ

（11）
に驚いて負傷し、ついに「発懐まして」、すなわち、激怒して、天の石窟に窪もってしまうのである。天の石窟に窪

もった理由として、古事記神話では怖れを挙げているが、日本書紀本文神話では怒りを挙げている点が異なっている。

つまり、古事記神話の場合、スサノヲの乱行を弁護し、その乱行を恐れるのであるが、それがスサノヲに対する憎し

みにはつながっていないのに対して、日本書紀本文神話の場合、最初からスサノヲを悪神と捉え、スサノヲの乱行を

弁護することはありません。その乱行に怒りを露わにしているのである。アマテラスの対応は両神話において著し

く異なっているのである。

以上のように、スサノヲの乱行に耐えかねて、天の石窟（日本書紀）では天の石窟に窪もってしまうという点

で、両神話は基本的に一致しているのであるが、スサノヲに対する弁護の有無や、天の石屋に窪もってしまった理由

については記述の違いを示しているのであるが、これらの違いは一見、大したものではないように感じられ

るけれども、スサノヲをどのように捉えているのかという点から眺めてみると、重要な違いがあるようにも思われる。

それはつぎのようなものである。

古事記神話では、アマテラスがスサノヲを弁護するという記述を通じて、スサノヲの乱行がけっして悪意に基づい

ているのではないということが示されており、アマテラスが天の石屋に窪もったのも、あくまで身の危険を感じたか

らであって、けっしてスサノヲを邪悪な存在として憎んでいるわけではないということが示されているように思わ

るのである。
この対して、日本書紀本文神話では、スサノヲを弁護することなく、その乱行はそのままスサノヲの悪行を表
していることになり、アマテラスが天の石窟に竜もった理由が怒りであるとされていることから、スサノヲが悪行を
繰り返す邪悪な存在であるということが示されているように思われるのである。
かつて指摘したように、スサノヲの乱行について両神話に大きな違いが見いだされるように思われる。スサノヲの乱行にアマテラスがどのような対応したのかという点についても、そのような位置づけの違いが背景にあること
によって、記述上の違いが生み出されていると考えられるのである。

〜天の石窟もりの影響〜

前述のように、アマテラスが竜もった場所は、古事記神話では「天の石窟」、日本書紀の本文神話と別伝神話
では「天の石窟」と呼ばれている。個別の神話に言及する場合には、この二つの呼称を使い分けるが、そのような位置づけの違いが背景にあること
て言及する場合、便宜的に「古事記神話」の呼称を用いることにした。なお、この二つの呼称は単に表記上の違い
であるとも思われるが、この場合の「石」、というのは建物の堅固さを表しているだけであって、自然にある洞窟とは
明確に区別すべきであるという指摘もある。その是非を明らかに判断することはできないが、考慮に値する指摘と言
えである。

さて、両神話はアマテラスが天の石屋に籠もったことによる影響について記述している。太陽神であるアマテラスが隠れたのであるから、世界が闇に陥られたと捉えている点で両神話は一致している。以下では、その違いについて検討することにしたい。

まずは、闇に遮された場所の指示が異なっているもの。古事記神話ではそれを高天原と萩原の中つ国であるとし、日本書紀本文神話では六合の内であるとする。『六合』とは通常、天と地と東西南北の四方のことを指す術語である。両神話が指している場所は厳密には一致していないようにも思われるが、古事記神話が高天原と萩原の中つ国の中で二つを挙げているからといって、それ以外の国などに隠されているのではなく、地上世界の一部が光に照らされていないと捉えていることにはならないであろう。

古事記神話では、アマテラスが天の石屋から運命共同体のように描かれている。なお、日本書紀本文神話では、アマテラスが天の石窟から運命共同体を運ぶと表現した洛神話は見いだされない。これはそのほど深い意味があるのではなか、単に記述を省略したもののと考えておきたい。
つぎに、古事記神話においてのみ、闇に閉ざされた世界で様々な災いが発生したと述べられている点である。

の神の声、狭蠍なす満ち、万の妖、悉く発見」という表現から伺われるように、その災いは神々ーおそらく邪悪
な神々ーが諌止することができたらされたと捉えている。これに対して、「日本書紀」の場合、本文神話と別伝神話
のいずれにもそのような記述は見いだせない。

このような記述は古事記神話に特有とも言える発想に基づいているのかもしれない。というのも、スサノヲが任せ
られた国を統治せず、泣いていたとき、山や河海の水分が枯渇して、「悪しき神の声、狭蠍の如く皆満ち、万の物の
光は世界を維持するのに不欠欠なものであり、その供給が止まる。

ので、水を司る性格を有している。そして、アマテラスは太陽の光を司る性格を有している。言うまでもなく、水
や光は世界を維持するのに不可欠なものであり、その供給が止まる。世界は機能不全に陥り、邪神が諌止すること
になると考えられているのである。⑫

そのほかの違いとして、闇に閉ざされた世界を何とかしようと集まった天つ神たちを、
古事記神話では「八百万の

表現していって、なぜそのような違いが生じているのか、その理由は不明であるが、興味深いものがある。なお、一般
に、日本の神々を総称して「八百万の神」と呼ぶのに対して、「日本書紀本文神話では「八百万の神」と呼んでいる点が挙げられる。両者とも一貫してそう
の神だけを指していることに注意しなければならない。

古事記神話と日本書紀神話の比較研究（岸根）
天つ神たちの企て

アマテラスが天の石屋に篭もってしまったことにより、世界は闇に覆われてしまった。そのため、天つ神たちは集まり、アマテラスを天の石屋から連れ戻す策について協議した。なお、天つ神たちが集まった場所は、古事記神話と日本書紀本文神話のいずれにおいても天の壇の河の河辺となっている。

協議の結果、天つ神たちによって、アマテラスを天の石屋から連れ戻すための企てが進められることがになる。それによって、ここには示さないことにする。

古事記神話

オモヒカネに考え方させる。

鏡と勾玉を作らせると。

（16）
四
占いを行う。

五
天の真賢木の各枝に勾玉、鏡、御幣を取り付けて、それをフトダマに持たせる。

六
アマノタタカラヲを石屋のそばに隠れ立たせる。

日本書紀本文神話

～～オモヒカネに考えさせる。～

～～常世の長鳴鳥を集めて鳴かせる。

～～アマノタタカラヲを石屋のそばに隠れ立たせる。

四
天の真賢木の各枝に玉、鏡、御幣を取り付け、それをアマノタタカラヲとフトダマに持たせ、ともに祈祷させる。

以上が両神話に見いだされる天つ神たちの企てに関わる記述である。内容に決定的な違いがあるわけではないが、両神話に違いを見いだすならば、記述の全体を通して、古事記神話の記述が個々の事柄についてかなり詳細であるのに対し、日本書紀本文神話の記述は簡潔であるという点が挙げられるであろう。その結果、古事記神話で言及されていることが日本書紀本文神話では言及されていないというような事例が少なく存在する。以下では、両神話における記述の違いについて四つの点を指摘しておきたい。

古事記神話と日本書紀神話の比較研究（岸根）

四一七
第一の点は、オモヒカネという神の位置づけについてである。天の神たちが協議している際に具体的な立案するの

がこのオモヒカネであるとする点で両神話は一致しているが、古事記神話がオモヒカネをタカミムスヒの子であると

明示しているのに対して、日本書紀本文神話ではそう明示していない。日本書紀本文神話だけではそう言えないのである。筆者は、日本書紀神話について、編纂者が正式に認めたものを本文神話、

編纂者が正式には認めず、参考資料的に扱っているものを別伝神話と基本的に理解しているのであるが、このオモヒ

カネの事例などを見ると、本文神話の内容を補う意味で別伝神話を合わせ読むという可能性が、日本書紀に

において認められているのかもしれない。

第二の点は、アマテラスを天の石屋から連れ戻す際に行う祭祀で用いる鏡と玉の由来についてである。古事記神話

では、天の安の河の河上にある天の壁石と天の金山の鉄を用いて、アマツマラとイシコリドメが鏡を作り、タマノヤ

が「八尺の勾姫の五百津のみすまるの珠」を作ったと記述しているが、日本書紀本文神話では「八咫の鏡」と呼ばれ

る鏡と「八坂楼の五百尺御鏡」と呼ばれる玉が登場しているものの、その由来については全く言及していない。また、

作られた玉が「曲玉」であると示されていて、古事記神話の記述に近いものもある。しかし、別伝神話にもアマ
第四の点は、アマノコヤネとフタマが行った祭祀についてである。この祭祀は、寄代としての賢木に鏡、玉、幣などを取り付け、高貴な神を迎えるためにに行うものと考えられるが、祭祀の実行については、①祭具を準備した神、②祭具を取り持ち神、③祈神である神という三つに分けて考察すると、古事記神話と日本書紀本文神話では、①と③はアマノコヤネとフタマの両神に対して、日本書紀別伝神話には異なる伝承も存在する。すなわち、第七段の第三書では、アマノコヤネとフタマは各々、朝廷の祭祀の主導権をめぐって競い合った中臣氏と忌部氏の祖神と位置づけられたり、隠れ戻すことにに関して大きな役割を演じているのは、アマノウズメという神名は、「天上的、髪飾りをした女」という意味であると考えられる。

（20）
あるが、古事記神話には見いだされない。なお、ここに出てくる笑いというのは、邪気を圧倒するような大笑いのこ
とを意味していると思われる。古事記神話の原文では笑いは実は「咲」などと表記されている。「わらふ」「さく」
つながる言葉であり、その点で「さく」という言葉とも意味の上で近づく。『わらふ』は「まる」に
割して、広げるのである。したがって、笑うことは、自分を大きく見せることで邪気を圧倒するという意図と同時
に、石屋の戸を開けるという意図も含まれているのである。

第三はアマテラスが戸を開けた状況に関する話である。両神話とも、アマテラス、自分が天の石屋に篭もって
いるのに、なぜその外でみんなが喜んでいるのか疑問に思って、戸を少し開けたとする点では一致している。しかし、
古事記神話ではもう一つの過程を加えている。すなわち、アマテラスの疑問に対し、アマノウズメが「あなたのありが
い方がいらっしゃるから、みんなで喜んでるのです」と答え、アマノコヤネとフタダマが少し開いた隙間から鏡
を見せる。アマテラスは、鏡に写った姿を自分とは気づかず、よく見ようと戸から少しずつ出ていったところを、ア
マノタデがアマテラスを引きずり出す形になっているのである。

以上のようない両神話とも、アマテラスを天の石屋から連れ出すことに関して、アマノウズメの活躍を記している
のであるが、概して言えば、その記述は、天の石屋からみに関することまでの記述と同様に、古事記神話の方が日本
本書の本文神話では「髪」となっている。両者のいずれにせよ、爪と同様に、身体の一部でありながら、身体から容易に分離しうるものが挙げられているのである。

髪や手足の爪を切ったり、抜いたりするというのは、切っ掛けにおいて身体に危害を加えるような罰ではないであろう。ま

た、部分であったものはたえ全体を離れても、部分であり続けるという、いわゆる感染言術的な観念から、スサノ

ヲの身体の一部を確保して、その自由を奪ったというように解釈するものもある。しかもハラヘ（祓へ）というのは、悪し

行為—とりわけ農耕に関わる祭祀の実施を妨害する行為—をするこ

とによって付着した罪を取り除くために行うものであって、ために、千位置戸のように、ハラヘに必要な物品を

提出せたり、罪が付着している身体の一部に身体全体を代表させて、それを廃棄したりするのである。身体に危害

を加えたり、身体の一部を確保して、自由を奪うということは、ハラヘによって罪を除去することは何の関係もな

いのである。したがって、髪や爪の切除は後者の、罪が付着している身体の一部に身体全体を代表させて、廃棄する

という行為に該当するものと思われる。

なお、本書の本文神話において、手の爪と足の爪の各々について、第七段の第二書の伝承では「凶爪物」「凶爪物」

であるが、同段の第三書では「吉爪棄物」「凶爪棄物」であると記述しているが、この記述において、爪を処罰と同一視し

て、廃棄すべきものとして捉えていることが端的に示されているであろう。このように、髪（または髪）や手足の爪

を切除することは、古事記神話、本書の本文神話とともに、ハラヘの一環として行ってしまい、両者に根本的な違いは
ないと考えられるのである。

最後は（二）スサノヲを高天原から去らせるということについてである。この行為自体は、古事記神話および日本書紀本文神話において、ハラヘに含まれている。

なお、（二）や（三）とは異なって、天神たちがスサノヲを高天原から去らせる点については、ハラヘは区別して考えなければならないのである。

そして、（一）や（二）とは異なる。天神たちがスサノヲを高天原から去らせるというのは、斯ッ神話において大きな違いがあるように思われる。それは古事記神話および日本書紀本文神話において、大きな問題があるように思われる。

古事記神話では、任せた海原を統治せよ、妣の国である良の堅州国に行きたいと呪詛させ、その前に先だって行われたイザナギによるシノヲに対する命令との関連で考察すべきものであろう。

古事記神話と日本書紀神話の比較研究（岸根）

（四十五）
とを意味するのであれば、かなり不自然なことになるであろう。なぜなら、この場合の追放はスサノヲが留まっていた草原の中に自らの日々を過ごしていたからの追放である。アマテラスが懸想に考えさせるように思えるが、これはスサノヲが自らの意志で起こしたものではない。根の堅州国に行かなければならない場所から立ち退いて、自分が行いたいと思っていた根の堅州国に追い立てることになるだろう。

追放という形になるのであったわけである。このように、自分が留まりたかった場所から立ち退いて、自分が行いたいと思っていた根の堅州国に追い立てることになるだろう。この場合、行かせたということが遺わすという意味で捉えられなければならないが、あくまでもその行為は行く本人が主導権を握っているわけではないのである。

他方、日本書紀における神が行う行為について考えてみる。そこで、イザナギはスサノヲを統治者にふさわしくない悪しき存在と捉え、遠いところにある根の国に行こうと命じた。それが「逐ふう」を表現している。これこそまさに追放であると言えるのである。天つ神たちによる「神からひらつぶ」や「逐ふう」は、イザナギが命令したことをそのまま継承しているのであって、極論すれば、イザナギの命令とは別に何か新たなことを命じたわけではない——そもそも、ごく一般的な天つ神が
サノナに対してそのような命令を与える立場にあるかどうかという点も問題になるであろう。 もし、そうだとすれば、イザナギがサノナに与えた命令が無効になってしまったであろう。 サノナがイザナギの命令に従って根の堅州国に希望通りに行かせようとしたと理解すべきであるし、日本書紀本文神話では、高天原における悪行による罪の発生に関する必要はない。 当初の予定通り、悪神サノナを根の堅州国に追放したと理解すべきであろう。

以上のように、天つ神のサノナへの対応について三段に分けて、古事記神話と日本書紀本文神話における記述の異同について考察してきたり。 異同を生じさせたる、髪（または髪）や手足の爪を切断させたりしてきたり。 記述内容は大体一致しているとされるもので、千位に至るたびにイザナギによってサノナに与えられた命令が違っているのは、サノナという神に対する捉え方が両神話において決定的に異なっているからである。 これは天つ神たちがイザナギによってサノナに与えられた
むすびに

以上のように、特にスサノヲのウケヒ、およびアマテラスの天の石屋篭もりに関しても、古事記神話と日本書紀神話—主としてその本文神話—の記述について比較検討を行った。スサノヲが昇天し、それを警戒したアマテラスのあいだでウケヒを行い、その結果を承けて、スサノヲが悪行に及び、それを避けて、アマテラスが天の石屋に篭もったという神話の進行自体については両神話において一致しているのであるが、スサノヲとアマテラスが行ったウケヒやアマテラスによる天の石屋篭もりに関する具体的な内容については両神話において様々な違いがある。更にこれについては特にアマテラスに対する捉え方の違いについての本稿で確認してきた。それらの違いから看取されるスサノヲという神に対する捉え方の違い—悪神なのか否か—こそ、両神話の基本的な構想に関わる大きな違いと言えるように思われるのである。今後、この点を十分に見据えながら、スサノヲが主役となる「出雲の神話」に関する比較研究を進めてゆきたい。
〇「紀大」の百一頁を参照のこと。

九 伝二の三百五頁を参照のこと。なお、建物ではなく、戸に注目してみると、古事記神話では「石屋戸」という表現のみがって「石戸」という表現がないのに対し、日本書紀本文神話では「磐戸」という表現がないという違いがある。

〇「記大」の八十頁を参照のこと。

十二 この点については「記王」の四百九百七十七頁を参照のこと。

十三「吉野河原」、「天安河河上」などとなっている点を考慮すると、後続する「河」の字と混同して、「天安河」の「河」の字が脱落したという可能性も考えられるであろう。

四〇「紀大」の百七頁を参照のこと。ただし、日本書紀別伝神話には「タマ」という名称を含む神に関する記述が複数あり、これらの神は玉の製作に関わる神と

第六段の第二書「アアカルタマ」。スサノヲに磐八坂樋の曲玉を進呈した。
トランス状態に入って、魂が自らの身体を離れて、隠れたアマテラスの魂を呼び戻そうとしているのである。

この一千年の伝承のうちの二つにおいて、アマテラスが戸を開けようとした直接の理由も異なるものになっていて、言説をしたアマト

マノヤネの声に引かれたということになっている。

この一千年の戸という語については、本文では「一千年の戸」と読み、千僧の台座に置かれたものと解釈した。なお、「釈

明二の三百八十六頁、三百八十六頁、二百三の百七十七頁、二百三の百七十七頁、二百三の百七十七頁と、独白の研究ではなく、「古事記伝」の記述を引用するにことに終始している。釈一」の三百五十八頁、五百四十九頁の記集の五十二頁の注四、記集の五百七十一頁・五百七十

二頁を参照のこと。釈集は「多くの方が選出する」\(\)とし、それを科するうちを「多くの物を科する」とすることを同一視す

の巻には、論理的に飛躍しているのではない。また、「一千年の戸の戸」に対する解釈については、「釈二」の三百五十八頁、三百八十六頁で、場所と解釈するのは不自然で、置業に置く被具を指すとし、「釈一」の三百五十八頁もその説に同意して。
四三四

（34）
引用文献
※ なお、略号表記の仕方は今回変更しているので、「比二」、「比三」との互換性はない。

根の堅州国と根の国の違いについては、後日、改めて論じたいと思う。

筆者も「比二」において、この「やらひにやらぶ」を追い払うという意味で理解していたが、ここで改めてそれを訂正してお

紀国
古事記神話と日本書紀神話の比較研究
（岸根）

三五